

## 仙台城跡大手門跡および周辺発掘調査（第 1 次）の成果について

## 1 調査要項

調査地点 仙台市青葉区川内 15-19、川内無番地 調査期間 令和 5 年 9 月 1 日～令和 6 年 12 月 18 日  
調査面積 約 64 m<sup>2</sup>

## 2 調査概要

『史跡仙台城跡整備基本計画』に基づき、大手門周辺の史跡整備のための発掘調査を実施した。令和 5 年度はそのうちの第 1 次調査であり、古写真や図面等をもとに、大手門が建てられていたと考えられる地点で調査を実施した。大手門脇櫓（<sup>わきやぐら</sup>再建）の西側（1 区）と、現存する大手門北側土塀の西側（<sup>どべい</sup>2 区）の 2 地点に調査区を設定した。そのうち 1 区では、大手門に関連する遺構として、礎石跡と石組側溝が検出された。また瓦を主体とした遺物が出土した。

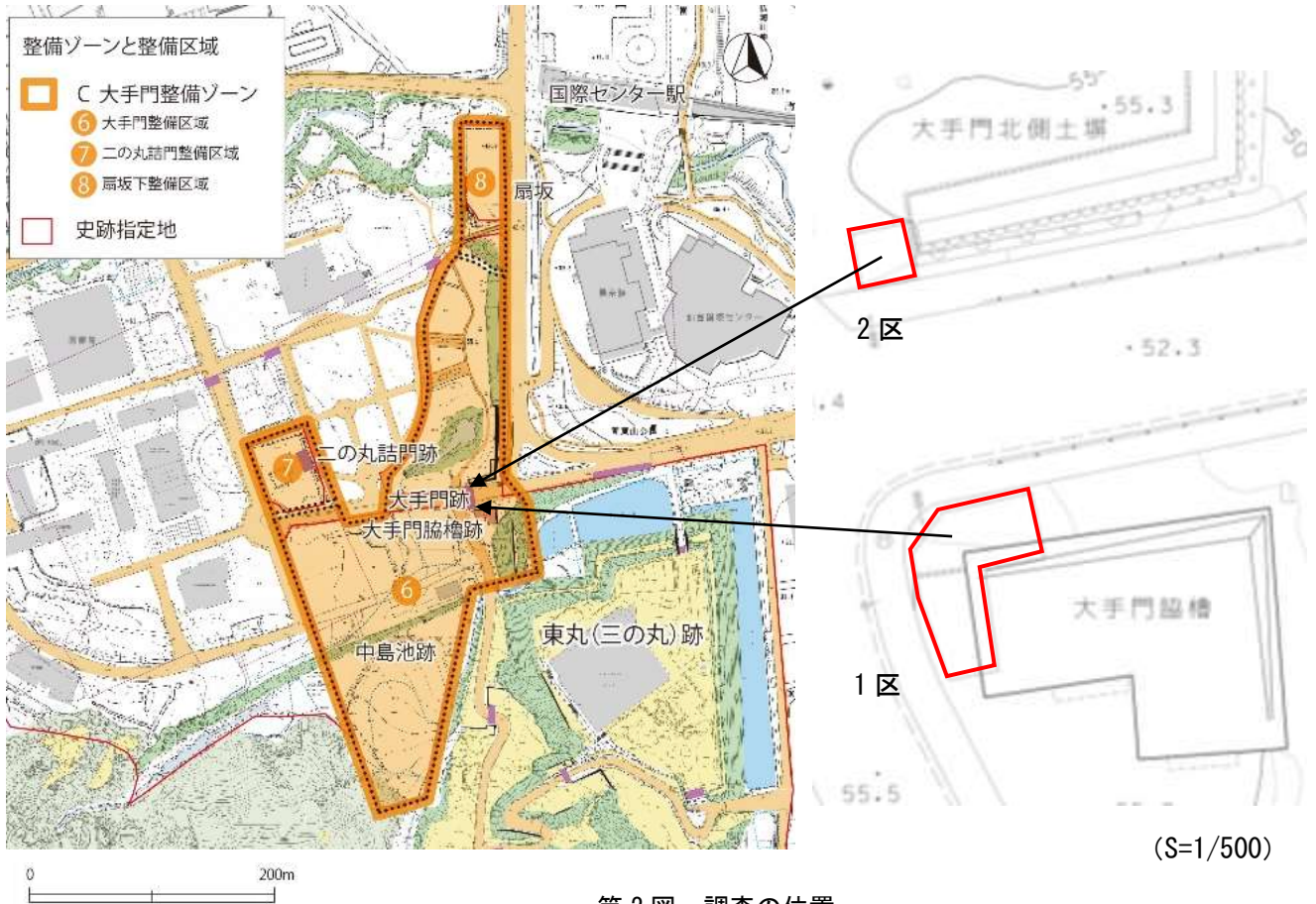
1 区では、大手門焼失後に行われたと考えられる埋設管の設置等により、大きく攪乱を受けていることが確認された（第 3～5 図）。そうした攪乱が及ばなかった範囲で、大手門に係る遺構が確認された。礎石跡は調査区の北西側で 3 箇所確認された（第 6～9 図）。いずれも礎石は残っておらず、根固め石のみが確認された。根固め石はそれぞれ円礫（4～18 cm 程度）で構成されている。北側は埋設管設置に伴い東西方向に削られ、西側では溝状の掘り込みによって南北方向に削られている。大手門脇櫓（再建）の西では、石組側溝が検出され（第 10 図）、南北方向から東西方向に屈曲する様子が確認された。石組側溝の堆積土からは焼失時のものと考えられる焼土や赤色化した瓦が確認された。古写真や図面から、大手門と大手門脇櫓の周囲には側溝が巡っていることが確認され、それら建物に伴う側溝として機能していたものと考えられる。側溝を構成する石材には、石を割る際のものと考えられる、電動工具によるものと推測される痕跡が確認された（第 11 図）。そのため、今回検出の石組側溝の構築時期については明治以降であるものと推測される。

今回の調査で確認された礎石跡の位置をもとに、大手門跡の昭和 5 年の測量図（小倉強『仙台城の建築』）を合成し位置を推測した（第 14 図）。大手門の南辺の礎石は 5 つであり、大手門南面の古写真を見ると、石組側溝の南北辺の延長線上に東から 2 番目の柱があることが見て取れる（第 12 図）。今回の調査区で確認した 3 つの礎石跡は石組側溝との位置関係と比較すると、東から 2～4 番目の礎石跡であると考えられる（第 15 図）。2 区は大手門北辺の推定位置付近に当たり、大手門北面の礎石跡は削平を受けて失われているものと考えられる。

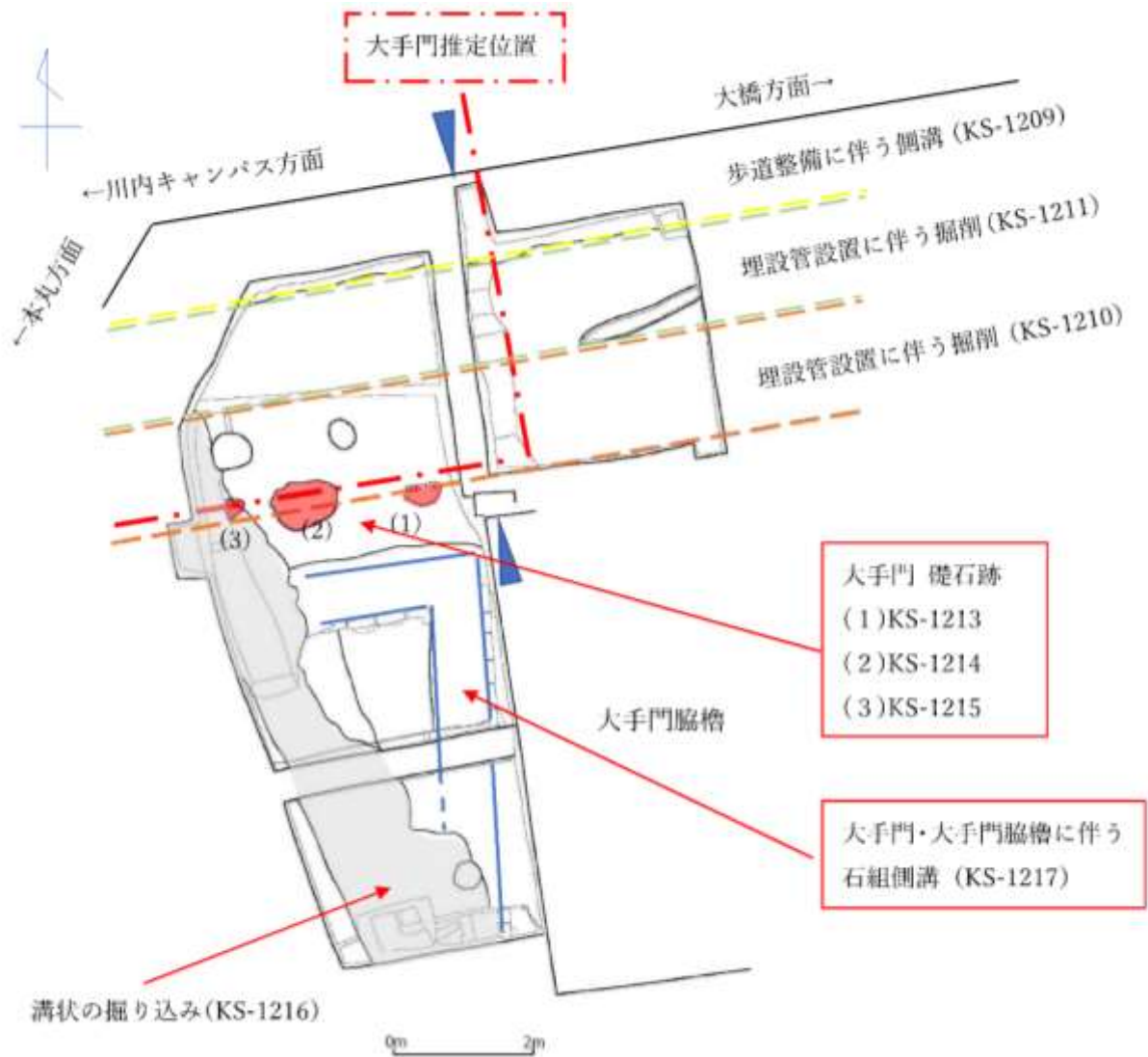


第 1 図 焼失前の大手門の様子（仙台市教育委員会 1967）

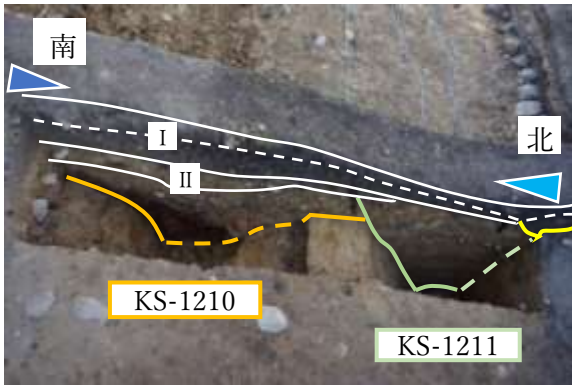
左写真：大手門東面（正面）、写真右：大手門西面（背面）



第2図 調査の位置



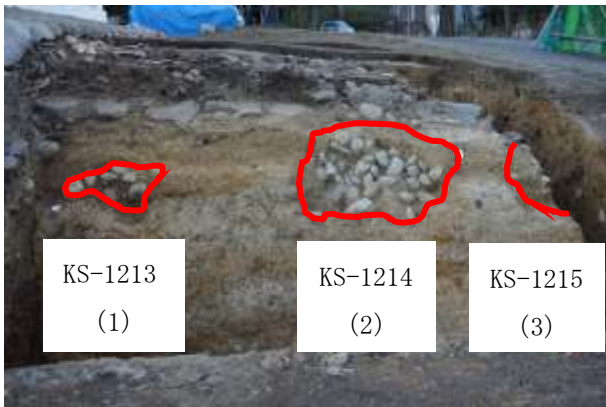
第3図 1区遺構模式図 (1/100)



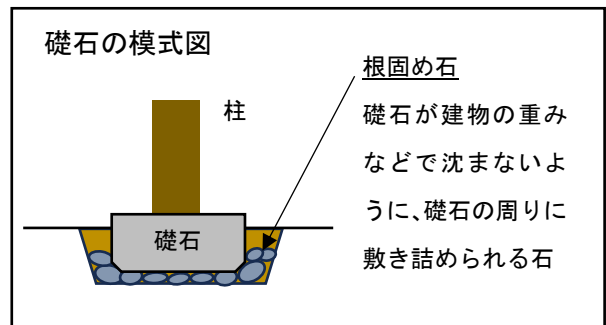
第4図 埋設管設置に伴う掘削（東から）



第5図 戦後の溝状の掘り込み（北西から）



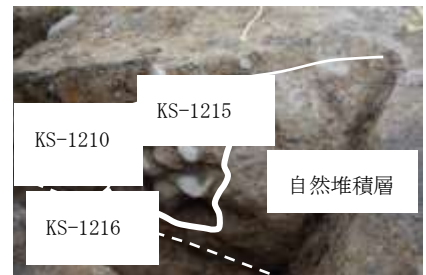
第6図 大手門礎石跡（北西から）



第7図 大手門礎石跡 KS-1213  
（北から）



第8図 大手門礎石跡 KS-1214  
（北から）



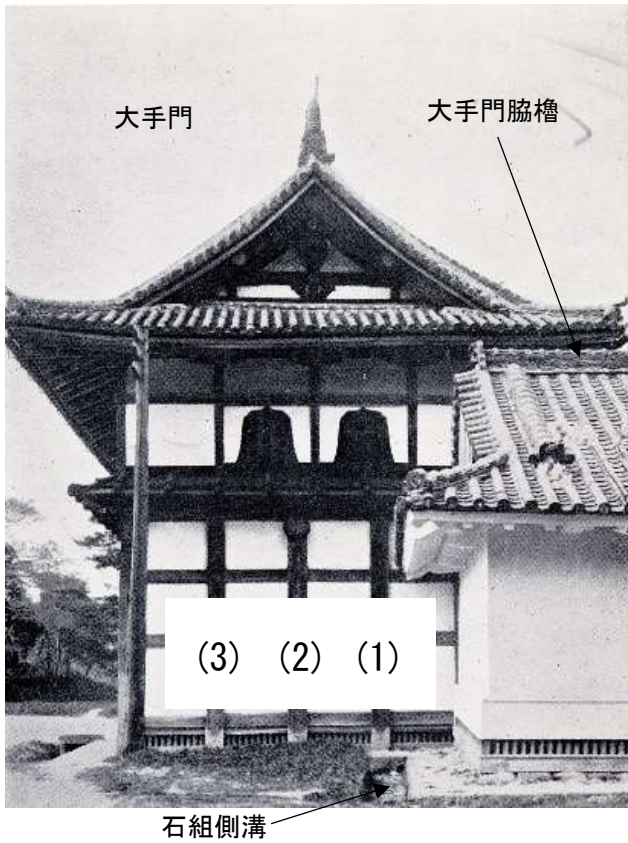
第9図 大手門礎石跡 KS-1215  
（西から）



第10図 石組側溝の検出状況（北から）



第11図 石組側溝 電気工具による痕跡(白枠内)



第 12 図 大手門南面全景

(『仙台城』 仙台市教育委員会 1967 に加筆)

大手門南端の東西方向の礎石は 5 本である。側面の古写真を見ると、石組側溝の南北方向の延長線上に東から 2 番目の柱があることが確認される。



第 13 図 礎石跡と石組側溝の検出状況 (北西から)

((1)~(3)は第 13 図と対応)



第 14 図 大手門の推定位置 (1/400)

(小倉強「仙台城の建築」図面を合成)

調査結果から推測すると、大手門は現在の道路を横断するように建っていたと考えられ、北端は歩道との境界付近になるものと考えられる。



発掘調査でも、石組側溝の南北方向の概ね延長線上に、(1)の礎石跡が位置することが確認された。第 13 図と比較すると、それぞれ (1)~(3) 同士が対応するものと推測される。